

## 西ドイツおよび岩手県における温泉医療について

岩手県立中央病院皮膚科 野 口 順 一

私たち日本人は温泉をレジャー的な面に比重を置いて考えがちですが、日本は温泉国として恵まれた環境にあるのですから、健康のためにもっと高度に活用すべきだと思います。

西ドイツのバイエルン地方の温泉を訪ねて、まず驚いたことは、その利用の仕方が徹底して医療面に集中していることでした。

日本の場合も、従来、温泉の活用は“湯治”としての性格が濃かったのですが、戦後の経済発展のなかで、レジャー産業と結びついた娯楽施設の一つという色彩が強くなってしまいました。いわば、先人の知恵を自ら捨ててしまったようなものです。

西ドイツの場合、訪れた人たちの滞在日数は普通は3～4週間です。同国では1年のうち五月から十月までの間、それぐらいの休暇は自由にとれますので、日本のように一時期に“ドッと繰り出す”ような騒ぎは起きません。

温泉地の中心部にはクア・ハオスと云うのがあり、これは州立の施設で、どの温泉でも非常に豪華な建物で、その周囲の庭園は楽園のようにすばらしく、また、よく手入れが行きとどいています。また、そこでは長期滞在の保養客を退屈させないように色々な催物があり、また趣味の会や運動のクラブ活動などが進められてゆきます。

一般の保養客は温泉地の医師を訪れて保険の書類手続きをしてもらい、また、その医師から湯治や種々の物理療法の処方箋（処方箋と云っても「薬の」ではない）をもらい、主としてクア・ハオス内にある保養施設に通って計画的に療養しています。どのようなことをして療養しているのかを申し上げますと、まず飲泉、浴泉、吸入（……これらは単純泉、塩類泉、炭酸泉、放射能泉、弱硫黄泉などが多い）、モール（泥炭）浴、鉍泥浴、圧注、サウナ、集団体操、水泳、水中体操、日光浴、ガス（CO<sub>2</sub>等）浴、散歩などが一般的です。これらはすべて医師の処方箋で行われるのであって、日本のように勝手気ままに湯治しているものではありません。

バイエルン州の北西部のバード・ブリュッケナホは住民人口が6,500の僻地の温泉ですが、そこで医療に従事している医師の数は、一般医7、専門医としては内科8、外科2、整形外科2、婦人科1、泌尿器・外科1で総計21名の多きを算します。

保養客の宿泊場所は、安い民宿（1泊で1,500～1,800円）から少し贅沢なホテル（3週間で約11万）までさまざまあります。西ドイツの温泉では食事療法も重要な保養要素とされておりまして、保養客にそのパンフレットを配布して指導し、また、食事療法学の講習を受けて資格を取得した旅館業者には「療養食提供」を示す看板を掲げることが許可されています。

保養にかかる費用は保険でまかなえる制度もあります。年金保険は連邦で、健康保険は州で管掌されていますが、ほかに身障者や低所得者のための保険もあります。ただし、西ドイツの年金保険や健康保険の加入者の負担は高く、全所得の約20%を納めているともいわれます。「高保障、高負担」と云ったところです。

さて、次に岩手県における温泉の医療面への利用の現況を考えますと、温泉病院としては、盛岡繋温泉病院、南昌病院（矢巾町）、国立花巻温泉病院、岩手労災病院（志戸平）の4ヶ所のほか、花巻、大沢、須川に診療所があって、全体で医師15人（内科10、外科3、整形外科2）が温泉医療に従事しております。すなわち、岩手県全体を数えても、医師の数は西ドイツの寒村の温

泉地であるバード・ブリュッケナオの医師の数にも及びません。

岩手県は温泉の宝庫と云われるだけあって165もの源泉数を誇っていますが、その医療面への活用はあまり進んでいません。

それでも、中・長期滞在型の湯治の温泉は結構あります。八幡平、松川、国見、夏油、須川などがそれです。

八幡平は環境庁指定の国民保養温泉で、岩手と秋田の両県にまたがっていますが、その秋田県側にある玉川温泉は医療的に注目を浴びており、夏季開設の診療所には東北大学医学部、岩手医科大学、県立中央病院（盛岡）から医師が出向いています。そこで、湯治の仕方特に入浴法や飲泉の方法や食事療法、また、脳イッ血予防の指導などが行われています。

本県で今後、注目してゆきたい温泉医療の形態として地域保養温泉があります。これらは主に冷鉱泉で、老人の保養施設に使われているケースが多く、老人達はそこに行くのを楽しみにしており、その順番を待ちきれないでいるほどです。主な所は、小屋の畑（安代町）、海上（浄法寺町）、七時雨（西根町）、矢巾（矢巾町）、飛龍山（宮守村）などがあります。これらの施設の建設には国民年金の資金が運用されています。

医療効果にも優れた泉質のものが多く、海上や七時雨の鉱泉の場合、炭酸やホウ酸が成分中に多量に含まれ、皮膚病や胃腸病などに効きめがあります。また、標高700mにある飛龍山は細菌の少ない冷泉で、皮膚病に良いと思われます。現在、近くの寺の管理で老人の保養センターとして利用されていますが、もっと積極的な活用が望まれます。

この他、繋温泉には岩手県国民健康保険団体連合会で経営している健康管理施設としてひまわり荘があり、主として県内各地からの保養客を扱い、その宿泊には各市町村からその費用に対して補助が出ています。また、そこでは保健婦の療養指導が受けられるようになっております。

他に各種の企業や団体の厚生施設としての保養所が各温泉にあり保養に利用されておりますが、これらは任意的な湯治のために宿泊していると云うだけで、医師などの指導はなく、組織的あるいは計画的な保養とは云えません。

以上が本県の医療面への温泉利用の現状で、昔からの湯治と云う習慣がまだ息づいている所もありますがしかし、組織的に温泉を管理し、有効に活用している例は少なく、観光資源としてだけ注目されているというのが事実であります。

大きな赤字を抱えている日本の現在の健康保険制度の中では難しいかも知れませんが、民間の保険会社との提携、あるいは市町村が主体となって、各人の社会的稼働率向上を目標として、地域の温泉を効果的に使う手だてを考えてゆく必要があると思います。

また、岩手県の広大な土地と夏季の冷涼な気候と豊富な温泉は、必ずや都会の人達を惹きつけずにはおかないと思うので、間もなく新幹線も開通しようとしていることから、都会の人達を観光宿泊ばかりでなく、中・長期滞在型の宿泊にも惹きつけるように、各地の温泉で諸施設の建設を計画してゆきたいものです。

(照会図5番) 泉風寄書 (5)